

『かの子撩乱』を読む

米本 浩二

瀬戸内寂聴『かの子撩乱』（一九六五年）は歌人、仏教研究家、小説家の岡本かの子（一八八九～一九三九年）の評伝小説である。「芸術が道徳であり、芸術が倫理であった」というかの子の生涯を軸に、夫の漫画家、岡本一平（一八八六～一九四八年）、長男の芸術家、岡本太郎（一九二一～一九六九）との深く結びついた魂の劇も描かれる。

芸術と愛に殉じ、世俗的にどんなに滑稽に思われようと思に介さない。そんなかの子を世間的な栄達に導くためには、自分を押し殺すことも厭わぬ一平。一平が果せなかった純粹芸術への夢を追いつめる太郎。かの子も一平も太郎も、俗事を超越した傑物という印象である。

評伝作家は、自分の器以上の対象と向き合ったとき、ど

う描けばよいのか。『かの子撩乱』を読みながら私は自問しつづけた。その答えは作品の中にあるだろう。ほかならぬこの作品が「俗事を超越した傑物」を描く苦闘の産物なのだから。一九〇九年、一平がかの子と初めて会ったときの印象は次のように描かれる。

「ネルの着物の中で豊かな肉づきの、娘々した軀が、ゴムまりのようにまるみをおびていた。骨組はまるい肉の中にがっちりしているようで、手足が、まるで人形のように短くついている。歩くと、その短い手足が不思議に優しく動いて、可憐な感じと、情熱的な肉の強さが奇妙にとけあい、男心をそそった」（講談社文庫『新装版 かの子撩乱』から引用。以下同じ）

人形のようなかの子。西洋人形ではなく、淨瑠璃に使う人形に近い。人間ばなれした異形性。作者寂聴はアタマに浮かぶままを書いていく。かの子の生涯を見渡し、その生の本質をとらえた上での荒業であろう。作品後半、かの子という人形を一平ら複数の黒子が操るという記述がある。その伏線にもなっている。

寂聴はまず、神奈川県川崎市の、かの子の生家大貫家の門前に立つ。大貫家は資産家である。かの子は一〇人きょうだいの長女。孤独な生い立ちの父寅吉はかの子を溺愛した。兄雪之助（晶川）は若くして文学で名をはせ、谷崎潤一郎とも親しかった。

かの子の父祖の地を探訪しながら、寂聴は、かの子の文学の源泉というべき「無限の憂愁の翳」に思いをはせる。不如意の運命への憂愁の翳なのか。かの子の文学は「原始人の情熱が、秩序を求めて悶え狂う詩」なのか。かの子という荒海に網を投げ、たぐりよせては思索する。

かの子は一〇代後半、歌や新体詩を雑誌や新聞にしきりに投稿する。一七歳、与謝野晶子と知り合い、『明星』に歌が載り始める。「かの子は、その感情や性格が形づけられる少女期を、日本文学史的にみればロマンチズムがそ

の主調をなしていた明治三十年代に過ぎたわけである」。

かの子、二歳。一平との暮らしが始まる。結婚の翌年、長男太郎が誕生。一平の収入増につれ一平の放蕩が始まり、結婚三年目にして夫婦は危機を迎えた。長女と次男を亡くす。かの子が精神病院に入院する事態となる。「芸術はバクハツだ」という息子太郎の有名な言葉どおり、かの子は深く沈潜することを選び、のちの創作活動のものになるエネルギーを蓄え込んでいったのであろう。

「あーあ、今に二人で巴里に行きませうね、シャンゼリゼーで馬車に乗りませうねえ」。かの子は幼い太郎に話しかける。「濃い青春の夢を追うロマンティストの母が、生活の幻滅に打ちひしがれ、起ち上る術も失っていた時代である」と太郎は書く。

うちしおれたかの子の姿に、一平は衝撃を受けた。一平が本格的な画家になって芸術を追求してくれると期待したのに、彼は漫画を仕事に選んだ。その後の一平の人生はかの子への贖罪のためにあった、と言っても過言ではあるまい。

かの子、二六歳。年下の堀切重夫と恋愛に陥る。一平は、「そんなに好きになった男なら、手許へつれてくればいいだろう」と言った。「この時の一平の心理は昏い魔界を共

にくぐりぬけてきて、漸く理解することの出来たかの子の異常な情熱の火のとり静め方は、この方法以外にないと悟っていたともとれるし、自分の与えた過去の罪過のつぐないに、かの子の欲するものは無条件に与えてやろうという心がまえともとれる」。重夫との同居生活が始まる。翌年、重夫は肺を病み、かの子の妹さんと恋愛関係になる。怒ったかの子は重夫を追い出す。

かの子、二九歳。慶大生の恒松安夫が岡本家に下宿し、以後、一九年間、同居する。恋愛抜きの人間的共感による同居だ。関東大震災やその後の復興で苦勞を共にし、一家を挙げての渡欧にも参加した安夫だが、恋人を得て、かの子の怒りを蒙り、岡本家を出る。安夫は帰郷し、島根県知事を二期務めた。

かの子は四〇歳を目前に、仏教研究家として世に知られるようになる。四〇歳で渡欧の途につこうとするかの子は『わが最終歌集』を刊行した。この歌集を最後に短歌に区切りをつけ、幼い頃からの夢であった小説に全力を傾ける決意を固めたのである。「歌神に白す」という序文が面白い。「歌神」である「あなた」に語りかける異例の書き方である。「わたくし」のみに於てあなたの恩寵に酬ゆる途は今日あな

たとお訣れる事であらねばならぬ」

「歌神に白す」は『苦海浄土』で知られる熊本県の作家、石牟礼道子（一九二七―二〇一八年）の私家版歌集『虹のくに』（一九四七年）のヒントになった可能性がある。『虹のくに』冒頭の散文も「あなた」に宛てた書簡スタイルなのだ。「とこしえに未完のうた。これをあなたにお返し致します。このうたのかずかずは、みんな、あなたから生まれ出たものであるが故に」というのである。

石牟礼道子は二〇歳で結婚する際、それまで親しんできた短歌と訣別するつもりで『虹のくに』を書いた。一〇代から短歌に親しんできた道子は三八歳年上の岡本かの子の歌集の何冊かは読んだことがあるだろう。とくに、『わが最終歌集』は題名からして大いに参考になったはずである。「歌神に白す」を読み、歌神へ語りかける文体がいまの心境にぴったりだと思い、みずからも「あなた」へ語りかけてみたのではないだろうか。時代を隔てた表現者ふたりの「あなた」の類似は興味深い。

かの子、四〇歳。一平、太郎、安夫らと欧州旅行に出かける。パリをへて、夫妻は英国に行く。ふたたびパリへ。ベルリン、イタリア、アメリカをめぐる帰国。シャンゼリ

ゼーで馬車に、という昔日の夢を果たし、パリに残る太郎とのつらい別れも経験した。約三年半の充実した旅だった。

はじめじめした日本的しがらみから解放たれて、天馬、空を行くかのごとき外国の日々は『かの子療乱』のクライマックスを飾るにふさわしいものだ。しかし、いまがクライマックスであるならば、以後の『かの子療乱』は落ち目の終息に向かうしかないのか。華やいだままストンと終わることはできないものか。

書き方の大胆な転換をこころみる。「やつぱりそこへ行つてみよう」。三番目の同居人の新田亀三（文庫本では仁田勇という仮名）との対面記が突如始まるのだ。岐阜から出る高山線。飛驒の仁田病院。仁田は、約束もなく訪れた寂聴を歓迎し、かの子の思い出を語つてやまない。

「私は一人の女が、怖しい芸術の魔神に魅入られ、三人の男を奴隷のように足元にふみすえ、その生血をしぼりとり、それを肥料に次第に自分の才能を肥えふとらせていく世にも奇怪で凄まじい芸術の魔神と人間との闘いの秘密に、次第に身も魂も奪われ、我を忘れていたのだった」。勢いを取り戻した寂聴はかの子の死まで一気に筆をはしらせる。

かの子の代表作と目されるものの多くが死後の刊行と

なった。代表作であるからには、評伝作者たる寂聴は、そのいちいちを解説、説明せねば、評伝を閉じることにはできない。この点でも『かの子療乱』は異色である。

かの子は人形だった。「一人の人形を動かす時、脚をもち、手をもつ、黒子がいる。かの子という華やかな人形の胴を扱うのが一平なら、恒松と仁田は、永久に黒衣のかげにかくれ、身をかがませつづけて、人形の手や足をささえた黒子の存在に当った」。

かの子没後、かの子の原稿を世に出すには、一平が決定稿の確認をせねばならない。ここでもたまたま異例の事態が起る。代表作『生々流転』に一平の筆が入っているのだ。かの子と伴走してきた寂聴だからこそ、それが分かる。「晩年は渾然一体となつてしまつた二人の文章は見きわめ難いほど同一の調子にとけこんでしまつた」という。

評伝作家は、自分の器以上の対象と向き合つたとき、どう描けばよいのか、という問いへの答えはもはや明らかだろう。日記や書簡など可能な限りの資料を入手し、関係者から徹底的に話を聞く。資料や人物と格闘するうち、「自分の器」なるものも大きくなる。世紀の傑物が射程内にある。書く欲びがある。